

レスリー・T・チャン 著
 栗原泉 訳 伊藤正 解説
 現代中国女工哀史

〈白水社、二〇一〇年二月、四五八頁〉

白水社は、フランスやフランス語圏で知られていた出版社であるが、近年中国関連の辞書や書籍を刊行するようになった。とはいえ、クセジュ文庫のように、ヨーロッパの雰囲気や日本に伝える出版社というイメージが強かった。そして、時流におもねるような本はなかったと記憶している。ところで、『女工哀史』といえば細井和喜蔵の名高いルポルタージュであり、自己の観察に基づいて産業革命期日本の過酷な労働実態を告発した名著である。それをふまえた本書のタイトルを見れば、原書の『Factory Girls』の訳語としてどうしても違和感を感じた。内容は、「改革開放」政策以後、急激に拡大した中国経済の象徴の一つである東莞に働く農村からの出稼ぎ女性

労働者とその友人家族、かれらの関係の希薄さ、拜金主義の横行、「ニセもの」製造の現場、はびこる売春、過酷な労働と生活の実態。だが、それに加えて重要なのは著者レスリー・チャンの一族の物語が関わってくることである。清朝末期に生まれ、民国で成長し、アメリカに留学し、鉱山技師として国民政府の元で活動し、進歩的な活動をしたものの、共産党に殺害された彼女の祖父、反右派闘争から文化大革命という、全体主義国家中華人民共和国の暗黒の歴史に翻弄された一族の物語が挿入される。邦訳タイトルからは読み取れない、そして読み取れない部分にこそ本書の真価がある。本書は第一部「都市」、第二部「村」に分けられているが、いずれも東莞での「女工」の歴史と、彼女の一族の歴史とが交錯している。

著者の家族史研究の観点から、彼女の一族の歴史も、また「女工」たちの歴史も整理されている。両者は無関係に見えて、現代中国の混沌のなかで通底する。

なお、あら探し風で恐縮だが「びちのミス、カート」（一九五頁）や「ニューヨーク市五番外、四五〇番地」（三二〇頁）といった、単純な校正ミスが散見され、著者の親族張宏について「三年後に母は帰らぬ人となった」（三五二頁）の、「両親は生き残った」（三五五頁）と近いページで矛盾があるなど、編集や校正のミスが目立つ。また、唐詩の原典探しの手間をかげずに、英文から重訳（二九八頁）したり、「東方紅」（一三七頁、一八二頁など）で定訳をもちいなかった理由も不明である。せつかくの原書の意義と、訳出の労苦とが画竜点睛を欠き、九仞の功を一簣に欠く結果となってしまうのは残念である。しかし何より、出版社としての白水社の品位を疑わせるような、いかにも売らんかなの内容を必ずしも正確に表現しないタイトルには失望を禁じ得なかった。

（三好章）